

# 博士学位論文審査要旨

2013年1月20日

論文題目： 馬琴読本の生成と展開

学位申請者： 三宅宏幸

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山田和人

副査： 文学研究科 教授 駒木 敏

副査： 同朋大学文学研究科 教授 服部 仁

要 旨：

本論文は、江戸時代後期に活躍した馬琴の長編読本を対象として、馬琴の典拠研究の精度をさらに引き上げるとともに、馬琴読本の研究に新たな視座と方法を提示するものである。馬琴読本の典拠研究では、中国小説との関連が指摘されることが多いなかで、日本の神話・説話・縁起・伝承・漢詩・和歌・俳諧などさまざまな古典との関わりを軸に比較・考察を試みた。馬琴は典拠となる本文や趣向をそのままに嵌め込むのではなく、複数の典拠を咀嚼し、自らの表現に変換していく手法を駆使しており、本論文は馬琴読本の生成の問題として典拠研究をとらえ直そうと意欲的に取り組んだ。

本論文は、第一部第三章、第二部二章、第三部三章、第四部二章、それに序章と結語を加えた四部構成からなる。第一部では、馬琴読本が典拠とする中国小説との関連を探る。新規に典拠を指摘するとともに、それらの典拠に和漢の説話を組み込む馬琴読本の手法を明らかにした。第二部では、聖徳太子伝承との関連から、馬琴の典拠が日本の神話・説話・縁起・伝承と広範に及ぶことを明らかにした。『椿説弓張月』の舜天丸、『南総里見八犬伝』の犬江親兵衛の形象に、聖徳太子伝承が深く関わっていることを新たに指摘した。第三部では、馬琴が読本作成にあたり典拠となる作品についての綿密な考証を行っていることを詳細に論じ、他方で馬琴の考証の誤謬についても指摘し、従来の典拠研究の課題を提示した。第四部は本論文のなかでは補論的な位置づけになるが、読本以外のジャンルにおける通俗軍談の利用方法を探り、馬琴の典拠利用の独自性を指摘した。

本論文は、馬琴読本の従来の典拠論を再検討し、新たな典拠を指摘するとともに、複数の典拠を、語句・本文・趣向・プロットにわたり、重層的、輻輳的に駆使することによって、馬琴読本が生成されていったことを明らかにした。さらに、馬琴の中編、長編読本の具体的な検証を重ねる必要があるが、こうした視点とアプローチは、専門分野でも高く評価されており、今後の馬琴読本の研究において不可欠なものとなるだろう。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2013年1月20日

論文題目： 馬琴読本の生成と展開

学位申請者： 三宅宏幸

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山田和人

副査： 文学研究科 教授 駒木 敏

副査： 同朋大学文学研究科 教授 服部 仁

要 旨：

上記審査委員3名は、2013年1月12日、午後3時から約2時間にわたって、扶桑館106教室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、提出論文について審査委員3名から出された研究内容に関するさまざまな質疑に対する的確に答えるとともに、専門分野における深い学識を示した。それによって、本論文の研究水準の高さと学術的な価値を証明した。さらに、学位申請者は、語学（英語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：馬琴読本の生成と展開

氏名：三宅 宏幸 (みやけ・ひろゆき)

要旨：

馬琴小説の出典研究は、山口剛氏が“読本”という日本近世小説のジャンルを「何等かの形式に於て中国の小説を模倣すること」と定義して以来、中国文学との関連を述べる研究が主流である。しかし、読本が中国の「演義」に則すように著述されるとはいえ、物語背景は基本的に本朝のことを描く。日本古来の神話、説話、伝承、寺社縁起など様々な古典の他に、能や謡曲、浄瑠璃や歌舞伎といった演劇、和歌、俳諧、漢詩などの諸文芸も看過することはできない。馬琴読本はこれらの和漢の文芸を用いて、どのように物語を生成したのか。本稿の目的はその一端を明らかにすることである。

第Ⅰ部は、これまでに言及されていない中国小説との関連を新たに指摘する内容でまとめた。

第一章では、馬琴が「得意」とした『開巻驚奇侠客伝』(天保3—同6年刊)を扱う。友人宛の書翰に「侠客伝は得意の作」と書いた馬琴は、『侠客伝』第一集自序に、書名にもなる「俠」を「身を殺して仁を成す者」と定めた。本章では、馬琴が「仁」を持つ「侠客」を表現するため、「仁徳」を大義とする周王朝が殷王朝を伐つ殷周革命に取材した、中国白話小説『封神演義』及び通俗軍談『通俗武王軍談』を利用したことを指摘する。さらにこの殷周説話が、登場人物の造型や物語構想に大きな影響を及ぼしており、未完に終わった作品の続編の構想にもこの殷周説話が関わることが確認できる。

第二章では、長編読本『近世説美少年録』(文政12—天保3年刊)及び続編『新局玉石童子訓』(弘化2—同5年刊)を用いる。『美少年録』は書肆に執筆を請われた作品であり、作品構想に悩んだ馬琴は、知友に借りていた中国白話小説『樗枰閑評』『緑牡丹』を閲読し、作品への利用を決める。だが馬琴自身、『樗枰』の方、『美少年録』の書名は不都合と書翰に書くように、『樗枰閑評』の登場人物には美少年的要素が少ない。この問題点を踏まえ、本章では中国の艶情小説『肉蒲団』(別名『覚後禅』)と『美少年録』及び続編『新局玉石童子訓』との関連を指摘する。『美少年録』には『肉蒲団』の人物造型や趣向、因果応報の思想など、種々の点で共通点が見出せる。結果、『美少年録』の背後には『肉蒲団』の持つ要素を読み取ることができ、重層的なテキストが提示されているとわかる。

第三章では、長編合巻『殺生石後日怪談』(文政7—天保4年刊)を取り上げ、物語の生成過程について検証する。『殺生石』は長編合巻に位置づけられるが、元来中本もの読本として作成された作品である。この『殺生石』が、複数の典拠に基づき構想が練られている。本作品の構想について、これまでは中国白話小説『封神演義』に依拠するとされてきた。だが、実際には『封神演義』だけでなく同じ殷周革命を描いた『通俗武王軍談』の設定をも利用している。さらに本作では、殷周説話の構想に基づきつつ和漢の様々な説話を挿入しており、馬琴が物語を著述する際の一手法を指摘することができる。

続いて第Ⅱ部には、馬琴読本と聖徳太子伝承との関わりを指摘する論考をまとめた。

第一章では馬琴の三大奇書の一つ『椿説弓張月』(文化4—同8年刊)を検証する。これまで『弓張月』の後半、琉球争乱の構想については中国白話小説『水滸後伝』が基になったといわれ

てきたが、虬の化身である矇雲を「十四五歳」という年齢で倒す舜天丸の人物像は、『水滸後伝』やこれまでに指摘された他の典拠に見出せない。舜天丸は『中山伝信録』（徐葆光、明和3年刊）などの記述に則して琉球王となるが、虚構部分では神仙から冥助を得、琉球を篡奪した矇雲を倒すなど、神力を持つ少年武将として描かれる。馬琴は『弓張月』冒頭に「為公向ふ処将夫驍し。洲民帝と仰ぐこと湯禹の如し」と書き、為朝を琉球の為政者とするはずであったが、考証上の問題から息子の舜天丸に変更せざるをえなかった。よって、舜天丸を湯禹のごとき為政者として描き出す必要があるわけだが、舜天丸の人物像について、従来検証が為されていない。そこで、『弓張月』の舜天丸が活躍する矇雲討伐譚に、聖徳太子伝承の影響が看取できることを指摘する。『弓張月』における舜天丸の矇雲討伐譚に物部守屋討伐伝承が利用されることで、馬琴は舜天丸に聖徳太子の様相を賦与し、「仁あり義あ」る舜天王を描出しようとしたのである。

第二章では、『南総里見八犬伝』（文化11—天保13年刊）において重要な徳目である仁の玉を持つ大江親兵衛に焦点を当て、彼の初陣「館山城合戦」に聖徳太子が十歳の時に「あらえびす」を一人で退治したという伝承「夷合戦」が利用されていることを指摘する。親兵衛が一人の供を連れて敵城に向かうこと、その際「蒼と白を雑え」た馬に乗ること、一人で敵城を征服すること、これらの共通点を具体的に取り上げ、さらに『八犬伝』本文にも、少年の聖人として聖徳太子の名が挙がることなどを以て、親兵衛に聖徳太子十歳時の形象が利用されていることが確定できる。そして、親兵衛と聖徳太子が共に不殺生の「仁」を実践する共通点から、合戦の様子だけでなく、親兵衛に太子の持つ「仁」の性質も賦与したことが指摘できる。

さらに第Ⅲ部では、馬琴の考証や批評と自作小説との関わりについて検証する論考を配した。

第一章では、『椿説弓張月』に用いられる典拠が執筆時期に近い考証随筆などに書かれた記述とは少々ずれる用例を取り上げる。『弓張月』は、日本古典文学大系において後藤丹治氏による精確な注釈が付き、先行研究においても「容易には越えがたい精度をもつ」と評されるが、検証したところ誤りも散見される。そこで本稿では、上方読本『保元平治闘図会』（秋里籬島作／西村中和画、享和元年刊）や通俗史書『前太平記』など、従来顧みられなかった書物と『弓張月』との関連について、具体例をあげて指摘した。このことから、馬琴が小説を執筆する際に使用する書物の守備範囲が、これまで考えられてきた以上に広範であることが明らかになった。

第二章では、天保期に書かれた『開巻驚奇俠客伝』と『南総里見八犬伝』を用いて、馬琴の考証や批評が著述にどのように影響したのかについて考察した。その際、等閑視されてきた中国白話小説『三国志演義』との関連に言及した。馬琴は唐本の『三国志演義』や和訳された『通俗三国志』などを読んでおり、〈三国志演義〉理解は一樣ではない。それらの中には内容についての評注が付いたものもある。馬琴の著作を検証した結果、馬琴は〈三国志演義〉の趣向を著作に単純に利用するのではなく、場面ごとの評注を参照しつつ、それらを踏まえ、なおかつ自身も注釈や批評を加えて論理立てながら、著作の物語を紡いでいることが確認できる。

第三章では、馬琴の白話小説批評と自作読本との関連を取り上げる。

馬琴は天保初年に、中国白話小説の批評を次々と執筆した。中でも、『水滸伝』の続書『水滸後伝』を批評した「水滸後伝国字評半閑窓談」（天保2年成立）は、濱田啓介氏が「分量形態ともに従前のものとは規模を異にし、いわば初めて本格的に構えられた小説評論」と述べられるように、高い評価を得る。だが従来の研究では、「半閑窓談」の記述を執筆時期が十年以上遡る『椿説弓張月』に投影するものが多く、執筆後の作品に影響するかは言及されない。そこで、「半閑窓談」と執筆時期に近い読本『開巻驚奇俠客伝』を取り上げ、登場人物の豪衰に着目し、『水滸後伝』からの影響と思われる箇所を指摘する。考察を加えた結果、『水滸後伝』は単純な典拠ではなく、「半閑窓談」の執筆を経た馬琴が工夫を凝らして利用することが明らかになった。そして両者の関連を確定することで、未完に終わった『俠客伝』の構想の一部が推定できる。

次に第IV部では、通俗軍談が馬琴以外の他ジャンルや他作家においてどのように利用されているのか、その一端を明らかにすることを目的とした。

中国講史小説を翻訳した通俗軍談は、近世前期の元禄・享保期に次々と刊行された。従来、通俗軍談の利用については、近世後期小説の読本との関連への言及が主であったが、通俗軍談が刊行されてから読本までは時間的な空気が長く、それまでに製作されていた近世小説に通俗軍談が利用されているのか否かという点は問題視されなかった。そこで第一章では、近世中期の小説、八文字屋本浮世草子と通俗軍談との関連を明らかにした。通俗軍談の中でも特に人気のある『通俗三国志』『通俗漢楚軍談』『通俗呉越軍談』の利用が認められる。そして両者の関連を踏まえた上で、浮世草子と読本というジャンル間における典拠利用方法の違いについて課題を提起した。

第二章では、好華堂野亭の〈図会もの〉を検証する。秋里籬島の手によって寛政から享和年間にかけて多く刊行された〈図会もの〉であるが、文化に入ってから姿を消した。しかし文政に入り、好華堂野亭の〈図会もの〉が刊行され始める。しかも所謂地誌の名所図会ではなく、武将の一代記を描いた〈図会〉であった。従来、この野亭の〈図会〉は籬島の〈図会〉の域を出ないという評価を受けてきた。だが調査した結果、野亭の〈図会〉には籬島とは異なり、虚構が描かれていることが判明した。それも、中国講史小説の翻訳である通俗軍談を利用して、武将達の活躍譚が描かれている。野亭の〈図会〉は単なる〈図会〉ではなく、当時の“読本”と類似した「史の余」を描いた小説と位置づけることが可能である。

以上、馬琴読本が様々な資料群を以て物語を生成していること、そしてその過程には、馬琴の考証や批評を下敷きとした理論も関わることを指摘した。そのような馬琴読本の方法は、他のジャンルや作者と比して複雑なものであり、当時においても“特殊”である蓋然性が高いと現段階では考えておきたい。

(3, 998字)